

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第 56 集 (2023年度) 2023年 7 月発行 : 107-113

I T 使用と教育の研究

関 口 礼 子

IT使用と教育の研究

関口礼子*

筆者の扱ってきた高等教育の関連領域はいろいろある。しかし、本稿では、筆者の研究の柱の1つであるITとの関連を振り返ってみたい。

東大時代

筆者がコンピュータに近い仕事を始めたのは、昭和38年に入学した東大大学院時代であった。社会調査に参加させてもらったということがきっかけであった。「コンピュータに近い」と言うのは、データをパンチカードで入力、ソーターで数えた時代であったからである。検定などの計算は、計算尺と手回しの計算機で行っていた。

京都大学時代

それが大きく展開したのは、京都大学に就任した小林哲也教授が、自分の比較教育学の研究室を実証的な研究をするようにしたいので手伝ってくれと、呼んでくれたことによる。

京都大学には、大型計算機センターがあり、そこを使わせてくれた。まだ、コンピュータが記憶装置を持っていなかった時代であり、データはパンチカード入力で、入力を一つ間違えると、そのカードをはじめから全部入力しなければならない時代であった。理科系の人々の使うプログラムは、フォートラン全盛の時代であった。まさに「コンピュータ」の時代であった。社会科学で用いられるSPSSのプログラムが現れたが、プログラムは全て、英語で書かねばならなかった。途中で、マニュアルは翻訳が出て、とても助けになった。

大型計算機センターは学内全ての人の出力が1か所でなされる。その中に、たまたま日本語文字が出力されたのをみた。それは晴天の霹靂にも似た気持ちで、将来あんなこともできるようになるのだ、どうしたらそうなれるのだろうかという喜びと、羨望でいっぱいになった。

図書館情報大学時代

筆者の目をITの方向に開いたのは、図書館情報大学に就任することになったことである。大学は、図書館学系統と情報学系統と大きく分かれていたが、筆者は、図書館学系の講座に配属され

*日本の社会研究所代表

た。当時の図書館学の教員は、いわゆる哲学的思考のタイプか How to な思考の人が多かったので、筆者はその中で、異色であった。しかし、大学が情報学にも力を入れていたので、そちらからの目も開かれた。コンピュータは、まだ「パソコン」ではなく、大型計算機の世界であった。また、筆記用具としてのワープロは机ほどの大きさであった。しかし、そのうち、ランが入れられ、研究室の端末から、センターの大型コンピュータにつながられ、大型計算機が使えるように、端末が入れるようになった。筆者は、文科系で唯一の研究室に端末を導入することを依頼した人物であった。文科系でも、希望者には研究室からランを通じて大型計算機につないでくれた大学の方針に感謝するよりほかない。

メーリングリストプログラムと roadmap lessons 時代

初めは、研究室端末の使用はメールから始まった。次いで、メーリングリストプログラムが耳に入った。筆者が、コンピュータプログラムに強くなれたのは、メーリングリストプログラムと Roadmap Lessons というプログラムのおかげである。情報学系統でも、コンピュータの使用はまだ Fortran の世界であった。筆者が文化系でありながら、コンピュータに結構強かったのは、このプログラムのおかげである。「メーリングリスト」というプログラムも、その頃アメリカの別の大学のやはり大学院生が始めたものである。1通のメールを送ると、ランで繋がれ、登録してある全世界のひとに届くプログラムである。その当時としては画期的なものであった。世界の人が何を考えているか、何を知っているかがわかる。中には常連がいて、例えばソ連（当時はまだ、ソ連であった）からの常連もいた。コンピュータのことについての知識の交換も盛んであった。

Roadmap Lessons というのは、メールでもって、コンピュータの手ほどきをしてくれる、これもアメリカの別の大学の大学院生が実験的にやり始めたコンピュータ指導のプログラムである。毎週、1レッスンずつメールで教材を送ってくれて新しい知識を学習できるようになっていた。今を風靡する WWW がイギリスで発明され、公開されたのは1993年で、初めは研究者のみの道具であったが、Roadmap Lessons の受講を始めたころ、新しい技術として、途中から急ぎょ1章追加され、紹介された。

筆者も刺激され、真似をして、その頃はコンピュータも日本語を扱えるようになっていたので、Roadmap Lessons を国内のコンピュータにつながれた人に分担してもらって翻訳をして、大学の WWW で公開してもらった。この時、何せ、みな初めてのことで、今では何でもない普通の専門用語の内容が不明であったり、また内容が分かったとしても、なんという日本語にしてよいかかわからず、翻訳者同士のディスカッションはメーリングリストを通じお互いに情報を交換して、決めていった。今では全く普通になっている訳語もその時、ディスカッションによって決められたものがたくさんある。参加者の中には、英語に強いというだけで割り当てた翻訳者が、内容が全くチンプンカンプンで分からないということもあって、苦勞もした。

この時、現在問題になっているような、いろいろコンピュータネットワークとそれに伴う問題も経験した。例えば、日本語への翻訳権を筆者のグループがもらったのに、原著者は同じ許可を別の

人にも与えてしまったということもあった。

また、「メーリングリストプログラム」は、登録してある全ての人に行く往来と同じだということを理解しないで、ちょっと学習して便利なことを知った跳ね上がりの学生が、筆者を批判するメールを、批判の根拠も知らせずに流すというようなこともあって、その対応に忙殺されるということもあった。発信は、大学の名前だけがわかる形で流れるので、それを読んだ外部の人たちは、大学内部の仲間割れととったようであった。

筆者が、最近日本で有名になった某アメリカの大学をこんな質の悪い学生がいる大学だと知ったのも、メーリングリストの通信のせいであった。あまりのひどさに、アメリカのその大学の担当副学長に、こんなひどいメールが世界中にばらまかれていますけれどご存じですか、とメールをしたこともあった。

Roadmap lessons は翻訳を終わって、それはしばらく図書館情報大学のホームページから、コンピュータ初歩の教材として日本国中に配布されていた。

『情報社会試論時代』

筆者は、『情報社会試論』というシリーズを刊行し始めた。これは、雑誌のような体裁をとってはいたが、雑誌のように編集者と企画者がいて、定期的に計画をたて原稿を依頼・催促するのではなくて、その質にたえる論文が集まった時、刊行する単行本のシリーズである。これは結局、筆者が図書館情報大学を停年になる2002年の第10巻まで続いた。それぞれの教員や大学院生たちは指導教員の所属する雑誌に投稿するので、ここに収録されている論文は、いわば情報学でも傍系の人々の論文である。応用領域の論文が多い。

カルガリー時代

その頃、筆者は、カナダのカルガリー大学に行く機会が与えられた。行くと、それまでカルガリー大学では、コンピュータ技術は、教員養成の必須科目だったのに、必修から外されたを知って、ショックを受けた。外した理由は、もうIT技術は教員だけに必要な技術ではなくなってあらゆる分野で、すべてにおいて必要になったからと説明された。ちょうど日本でようやく教員のコンピュータ技術の習得が話題になり始めたころのことである。

それからしばらくたって、東京都の教員が外国の教育の研修にやってきた。少しばかり、お手伝いをしたが、学校見学の終わりの感想で「こんなに、授業の中で、ITが用いられているとは思わなかった。ショックである」と語っていた。私がまだカルガリーを研究対象の地にしていた頃のことである。カナダは、広大な地域と人手不足から、遠隔教育は盛んである。その領域でも用いられ始めていた。

WWWの中にも、優れた論文や資料が表れ始めていたが、まだ、日本は紙媒体一辺倒の時代で、学術論文の中で文献として使ってはならないという雰囲気であった。Webに発表されている論文

や文献資料も、よいものは印刷媒体で発表されている資料と同様に学術レベルに引き上げて評価してもらわねばならない。コンピュータ資料を紙の文献資料と同等に扱ってもらうには、紙の文献と一っしょに引用文献一覧に、並べなくてはならない。欧文の文献と日本語の文献を同時に並べ、かつ、Webの文献も一緒に記載する方法を提案した。Modified APA Style と言うのがそれである。

この時代、努力したもう一つの事柄は、コンピュータのオンライン手段を用いて、授業を行う方法である。実験を始めた。その過程の分析をまとめたのは幾つかあったが、『情報社会試論』の第10巻に載せてある。これはコンピュータがまだ、文字情報しか扱えなかった時代のものであるが、Webを見て好きな時にアクセスして、自由に学習してくださいという Roadmap Lessons 時代の非同同期型の授業でなく、同じ時間にあちらこちらの地域に分散している受講者にアクセスしてもらって行う同期型の授業の試みであった。神戸の図書館に勤務する大学院の学生で、勤務地と大学が遠いために、いつまでも単位が揃えられずに留年を繰り返していた大学院生や、カナダに留学をしたが日本で行われている大学の授業にオンラインで出席したい学生、小さいお子さんがいて、毎週大学まで来るのが困難な学生が自宅にいながらゼミに出席して学内で授業に参加している学生と一緒にディスカッションする同期型の授業の実験をしたときの分析が行われた。手段は、その当時のコンピュータの状況で、メールである。社会人学生で、期間中にたまたま海外に出張した学生も、授業の時間に海外からアクセスを試みてくれたりしたが、これはネットワークが繋がらなかった。この時代のコンピュータの技術とネットワークの技術のことであるから、文字情報のメールが手段であった。

その後の展開

筆者も、2009年、教育の現場を去った。2020年ごろから、コロナ騒ぎで、全世界的に対面授業が不可能になった。にわかに、非対面の授業がクローズアップした。それと同時に、その間のコンピュータ技術の進歩もすさまじく、文字情報のみでなく、音声情報、画像・動画と通信技術も大きく変化した。めまぐるしい技術の進歩についてゆくのには、筆者もアップアップである。カナダの大学から、オンラインによる授業を開始するという連絡が入ったので、日本に帰ってきてしまっていたが、さっそく受講させてもらった。筆者が日本にいながらカナダのビクトリア大学で受講者として参加した2020年の授業の分析で、2021年の日本カナダ教育学会の年次大会で報告を行ったものである。カナダで授業を行いカナダで発表している発表者と同じセッションで私は日本にいて日本で行った報告であった。『大学論集』の論文は、この報告をベースに書き直したものである。コンピュータを使った遠隔授業も、手段も Zoom というプログラムその他が開発されて、ここまで来たか、という感じである。

昔、研究員をさせていただいていた広島大学高等教育研究開発センターに連絡すると、審査を過ぎてしまっているが、レフェリーなしで、その分析を『大学論集』に載せていただけるという特別の返事をいただいた。私のこの関連領域の論文の最後の論文になるであろう。

その後も、IT は、2022年ごろから、Chat GPT に代表される生成 AI と呼ぶ全く新しい原理のプロ

グラムを実用化した。それはすさまじい勢いで、広がりつつあるようだ。筆者もさっそく使って、夫婦別姓選択制について情報を求めてみると、通称は使用できるが、年金のみは通称では支給できないと答えが返ってきた。筆者は、現在、年金を「関口礼子」（俗にいう通称、私自身は本名だと思っている）で受けている。その返答は間違っていることを知らせたいと追加の質問をしようとしたら、画面が閉じられて、続行できなくなってしまった。このように間違った情報をまことしやかに流布されると困る。

今、著作権、研究の評価、人間の評価（人事）、果ては、「人権」の概念まで、すべてにわたって変わってこようとしている。筆者はここで引退ということになるが、今後全く新しい原理で、人間社会も学問の世界も運営されていくことになるのであろうか。この急激な変化に人間がついてゆけるのか、心配である。